「声」を超えて心をつなぐ

高丘中学校二年　河野　佑斗

僕の祖母には「声」がない。首元にある「永久気管孔」という小さな穴を使って呼吸をしているため、声帯を使って声を出すことができない。

祖母と話をするとき、僕たちは前後の会話の流れから祖母の話したいことを想像したり、口の形や表情だけで「お腹すいたの？」「ありがとう」といったやり取りをすることもある。話が分からない時は母が祖母の言いたいことを通訳してくれる。僕が幼い頃からこのスタイルだったので、僕にとって祖母と声をこれが普通ではないことを気づかされることもあり、世の中にとっては使わずに話すことは、ごく当たり前のことだった。しかし、買い物に行った先などで通りすがりに人が祖母の首元をじろじろ見ていたり、話は聞こえてるのに大声で話そうとする人もいた。紙に書くのに時間がかかって困った顔をされたこともあり、世の中にとっては

があった。

なぜ祖母は声を失ったのか。その理由を詳しく聞いたのは、僕が小学6年生になってからのことだった。母から教えてもらった話によると、祖母は甲状腺がんという病気になり、声を出す器官をすべて取り除く手術をしたのだという。そのとき、母はちょうど今の僕と同じ中学2年生だったらしい。

命を守るためには、声を諦めるしかなかったということだ。声を失うということがどれほど恐ろしく、辛い決断だったか、今の僕には想像もできない。自分の思いを声で伝えられないイライラや不安は、きっと僕が思ってる数十倍はあったと思う。それでも祖母は落ちこまずに、生きようと懸命に頑張り、僕たち家族の手助けなどしてくれている。その事実を知ったとき、胸がしめ付けられると同時に、祖母へ尊敬の気持ちと感謝の思いがこみ上げてきた。

祖母と接する中で、僕はコミュニケーショ

ンとは何だろうという事について考えるようになった。「会話」とは、相手と話すことだけが「会話」ではないということだ。

以前、僕が部活のことで悩んで落ち込んでいたとき、祖母はうんうんとうなずき、僕の好きなお菓子を出してくれ、話も聞いてくれた。僕の言葉選びをするのを待ってくれ、聞き終わると「大丈夫」と言ってくれたのが口の動きで分かった。その時、声という音がなくても、相手を思いやる気持ちがあれば心はしっかりと通じるということを感じた。

しかし、社会を見てみると、声で素早く会話するということが当たり前とされ、そうでない人たちが置いてきぼりになる場面がある。文字を読むのに時間がかかったり、言葉をうまく発せられなかったりする人に対して、周りが話を聞くのを諦めてしまったり、関係を深めたくなかったりしてしまうことは、その人の伝えたい気持ちや存在そのものを軽くみてしまうことにつながってしまうのではないのだ

ろうか。人は誰もが、自分の想いを表現し、他者とつながるという権利を持っているはずだ。

祖母が僕に教えてくれたのは、「言葉の音を聞くこと」ではなく、「相手の心に耳を傾けること」の大切さだと思う。声が出ないことや、身体に障害があることは、その人の個性や特徴の一部に過ぎない。大切なのは、自分とは異なるコミュニケーションの方法を持つ人に出会ったとき、戸惑ってさけようとはせずに、（どうすれば伝わるのかな）と一緒に考える気持ちでいることだと思う。

これから僕は、街や学校で困っている人や、想いを伝えるのに時間を必要としている人を見かけたとき、自分から寄りそい、落ち着いて話を真剣に聞く人間になりたい。そして、どんな伝え方であっても、誰もが自分の思いを尊重され、安心して自分らしく暮らしていける社会を作っていきたいと思う。